家族らしくあることと保育

――「家族する時間」を支える保育実践――

明星大学　石田健太郎

1　目的

現在の保育制度や幼児教育制度は、制度を利用しなくても子どもを保育できるような家族や協働できるような力のある家族を、あたりまえの標準的な家族と捉えるような価値空間のもと構成されている。このような望ましさを備えた家族を前提とした保育実践のあり方は、専門職養成課程におけるその担い手にも、また、その受け手にも無批判に受け入れられてきたと考えられる。たとえば、家事サービスなどの外部化による生活の社会化は、それまで家族の内で行われていた様々な「自然さ」を喪失させるプロセスとして理解されやすい。わが国の幼児教育界の理論的指導者であった倉橋惣三の言葉を借りれば、子どもは、おとなの「実生活を傍観して、活発なる好奇心を心の中に促される」ものであるはずだが、家族に提供される財やサービスの増加によって家族ならあたりまえの「自然」な生活の中で育つ機会が子どもたちから奪われてしまっていると捉えられるからであり、家族の養育力を衰退させる〈問題〉として考えられているからである。

したがって、本報告では子どもの養育に関する社会システムとしての保育の在り方とその養成課程に埋め込まれた規範や問いの立て方・語り方について、児童虐待問題や家事労働問題などをとりあげながら、明らかにしていくことにしたい。また、本報告での検討を通じて、標準的家族モデルから多様な家族のあり方を前提とした保育実践へとその枠組みを変容させていくことの必要性と意義についても述べる。

2　研究内容

児童虐待問題や家事労働問題といった問題について、リスク社会や時間資源の分配といった社会学的な観点から保育および子育て支援の文脈に位置づけなおしながら、検討を行う。リスク社会化は、予防を重視した保育実践を要請するし、共働き家庭や格差の増大は家族内における時間資源の分配を変容させ、保育実践をとりまく環境をますます困難なものにしている。高速化・高密度化する社会的時間によって、家族も保育実践も、さまざまな問題を抱え込ませられている。

3　結論

家族であることが人びとのライフスタイルの一つとして選択される現象となった現代社会において、家族とは、単によい家族である（doing family）だけではなく、周囲からもまた自分たち自身からも家族らしくある（displayed family）ように見えることが必要となった。子どもと家族を支える保育実践は、このような「家族する時間」を支える優れた文化実践であり、子どもと家族の「生活で生活を生活へ」といざなう、社会連帯のひとつのかたちとして理解可能である。子どもと家族が劣化し、そこに問題があるから「支援してあげる」のではなく、子育てや子育ちという社会的行為それ自体に価値があるからこそ「支援する必要がある」と考え、子どもを真ん中にした保育実践（Child and Family-Centered Care）の展開が模索されている。

文献

石田健太郎,2017,「家族らしくあることと保育」齋藤政子編『安心感と憧れが育つひと・もの・こと』明星大学出版部